

研究ノート

「吉野山」歌補遺

同志社女子大学 表象文化学部・日本語日本文学科 教授

吉 海 直 人

一、はじめに

以前「吉野山」歌顛末記」と題して、新島襄に関わりの深い「吉野山」歌について、発掘した資料を紹介しつつあれこれ述べたことがある。^①その後いくつか気付いたことや、補うべき資料が見つかったので、ここにその補遺を記しておきたい。

二、渡辺論文紹介

まず「吉野山」歌に関する研究について、近世文学を研究されている渡辺憲司氏が「佐河田昌俊の歌一首管見」という論文を書かれていることがわかった。^②この論文において、歌にまつわるさまざまなことが資料を基にして詳細に論じられているので、是非参考にして頂きたい。ただしさすがに新島襄との関わりにまでは言及されていない。

その中で渡辺氏は、「吉野山」歌が『風俗文選』・『集外歌仙』・『近世三十六歌仙』・『近代一人一首』・『翁草』・『雨夜燈』・『北窓瑣談』・『ひともと草』・『雨窓閑話』・『続近世畸人伝』・『歌林一枝』・『諺介集』・『蠅翼』などの秀歌撰や随筆にとりあげられていることを紹介されている。これによって「吉野山」歌は、思った以上に知名度の高い歌だったことが証明された。

また渡辺氏は「吉野山」歌の成立に関しても、『高階尚俊歌集』に、遊行上人よりすすめ給ひし五十首の歌の中に

よし野山花待ころの朝な朝なころにかかる嶺のしら雲

とあることから、ここに見える「遊行上人」を「三十三世他阿上人」と特定された上で、その没年が慶長十七、八年であることから、昌俊三十四、五歳以前の作であることを考証しておられる。さらに『高階尚俊歌集』に収められた歌が慶長十二年頃のものが多いことから、昌俊がまだ無名であった二十歳代の詠ではないかとも推測されている。

続いて渡辺氏は「吉野山」歌の本歌として、

1 そむくべきわが世や近くなりぬらんころにかかる峰のしら雲

2 よしの山花さきぬればあぢきなくころにかかるみねのしら雲

(『続古今集』 知家)

の二首を指摘しておられる。確かに二番目の寂然法師の歌など、用語的にもかなり似通っている。あるいはこの歌によって、「花咲く」という異同が生じた可能性もあるのではないだろうか。それに加えて、

3 吉野山雲に心のかかるより花の頃は空にしるしも (定家)

4 小倉山しぐるる頃は朝な朝な昨日はうすきよものもみぢ葉 (定家)

5 何となく春になりぬときく日より心にかかるみよしの山 (西行)

6 おぼつかないづれの山の峰よりか待たる花の咲きはじむらん(西行)
 といった類歌もあげておられる。こういった類歌を見ると、必ずしも昌俊歌が独創的な歌ではないことがわかる。というよりも、吉野山の桜を詠むパターンの存在が浮上することになる。

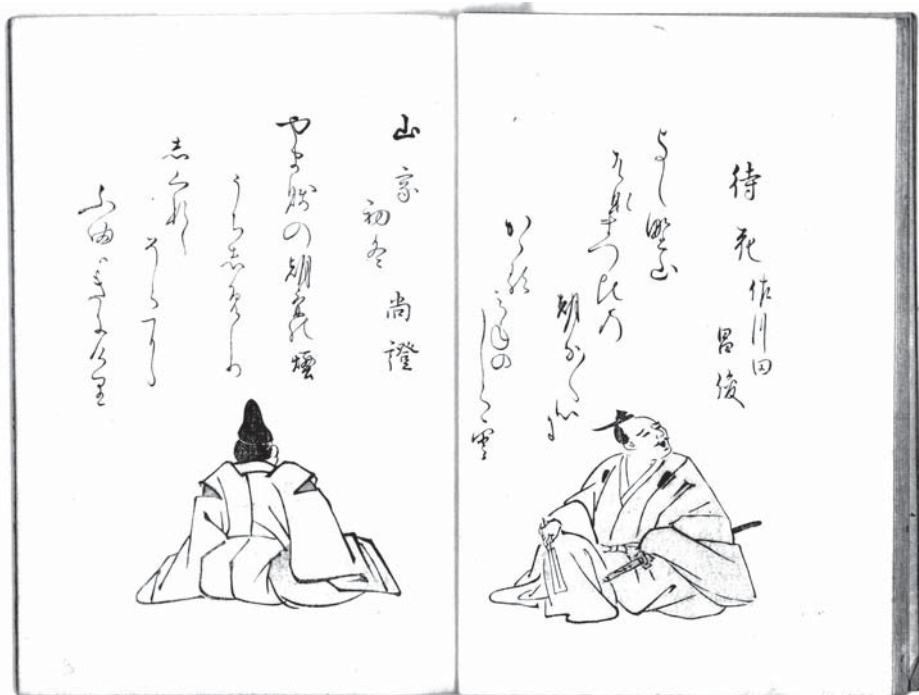
三、集外歌仙について

次に資料として、版本の『集外三十六歌仙』が入手できたので、該当箇所を図版で掲載したい。ついでに本書の簡単な書誌を記しておく。

書名は表紙左の刷題簽に「集外三十六歌仙」とある。撰者は後水尾院とされている。寸法はタテ23・2cm×ヨコ16・6cmの半紙本。丁数は墨付二十四丁(遊紙なし)。刊年は末尾に「寛政九丁巳正月吉旦／東都山下町／萬屋太治右衛門版」とあることから、寛政九年正月に刊行されたことがわかる。最初に安田貞雄の序文があり、最後に稲梁軒風斎の跋が添えられている。歌仙絵は緑毛斎栄保典繁画、和歌は芝江釣叟書である。なお歌仙絵の衣装には淡彩が施されている。歌仙は左方が平常縁から木下長嘯子までの十八名、右方が種玉斎宗祇から松永貞徳までの十八名となっている。室町時代から江戸初期に至る武将歌人であるが、佐川田昌俊は左方の十六番目に位置している。「待花」題ということで、和歌も「はなまつ」本文となっている。

待花 佐川田昌俊

よし野山はなまつ比の朝なく心にかるみねのしら雲



図版1 『集外歌仙』挿絵

四、短冊について

また、偶然「吉野山」歌の短冊を二葉入手したので、これも図版として掲載しておきたい。そのうちの一葉は作者名が記されていないが、もう一葉には「昌俊」と記されている。これが自筆かどうかは残念なことに未詳である。しかし少なくとも、後世において複数の短冊に染筆されるほど知名度が高かったことの証拠にはなるであろう。恐らく探せば短冊や色紙の類はまだいくつも見つかるはずである。

芳野山花待ころの朝なく心にかゝるみねのしらくも 昌俊

芳野山花まつ頃の朝なくこゝろにかゝる峰のしら雲



図版2 短冊二葉

五、おわりに

以前掲載した論文では、『集外歌仙』の写本の絵・『秀雅百人一首』版本の挿絵・徳川家光の自筆色紙を図版として掲載しておいた。今回はそれに『集外歌仙』の版本の挿絵・短冊二葉を追加掲載することができた。これで「吉野山」歌に関する基礎的な資料はほぼ出揃ったことになりそうだ。

〔注〕

(1) 吉海直人「吉野山」歌類末記」同志社談叢27・平成19年3月

(2) 渡辺憲司氏「佐河田昌俊の歌一首管見」日本文学研究15（梅光女学院大学）・昭和54年11月。なお渡辺氏は『近世大名文芸圏研究』（八木書店）平成9年2月の中にこれを含めた佐河田昌俊に関する一連の研究をまとめておられる。